

柳田社会科の成立について (第1報)

森本正巳

The Establishment of Yanagida's Social Studies (I)

Masami MORIMOTO

はじめに

昭和20年8月11日の『炭焼日記』に柳田国男は、「早朝長岡氏を訪ふ、不在。後向ふから来て時局の迫れる話をきかせられる。夕方電話あり、いよいよ働かねばならぬ世になりぬ。」¹⁾(長岡氏とは当時の警視総監である)と記している。日本の敗戦が決定的になったことを知り、いよいよ自己の学問の完成に向けての覚悟をあらたにしている。彼はこの時71歳であった。そしてその言葉を裏付けるように、『炭焼日記』の同年12月29日には「本年の文業、之にて漸く千枚に達す。」²⁾と記している。

敗戦を契機に自己の学問の成果を世に問うために、多忙を極めた柳田ではあったが、その多忙の間をぬって二つの教育実践を試み立派に完成させている。『年譜』³⁾から教育実践の関係箇所を抜粋すると次の通りである。

- ・昭和21年(1946年) 72歳
5月3日 成城学園初等学校の柴田勝也他4人と話し方教育について談話。
- ・昭和22年(1947年) 73歳
4月9日 午後成城学園の教員のため自宅で社会科の教育方法について話す。
10月27日 文部省社会科教育研究委員になる。
- ・昭和23年(1948年) 74歳
5月15日 東京書籍株式会社の小学中学国語科検定教科書の監修を受諾。
- ・昭和24年(1949年) 75歳
6月16日 この日より毎週木曜日、成城学園教師のために社会科研究会を開く。

(文中傍点筆者)

戦時中に執筆された『子ども風土記』・『火の昔』・『村と学童』などの児童向きの著書に見られるように、子供の将来に関心を寄せていた柳田は、戦後は積極的に教科書作りに加わり東京書籍の国語教科書『新しい国語』(小学校用中学校用)『国語』(高校用)と実業之日本社の社会科教科書『日本の社会』(小学校用)に自説を展開したのである。

柳田の学問が民俗学の領域を越え歴史学・文学・思想史等の領域に多大な影響を与えたことはあらためて言うまでもないが、まず関係は無いと思われる教育にも関心は及びその所信を発表したのである。本稿は柳田と社会科との関係について第一次単元成立時までの経過についてまとめたものである。

I 柳田の教育論と社会科論

1. 教育論

長浜功は「柳田国男を評して、身のまわりのことどもを学問に高めた人と評した人がある。うすぼけた氏神サマや田舎を学問の対象とし、そのなかに常民の精神史と文化史を位置づけた功績はいかなる論敵といえどもこれを認めざるをえまい。絵巻物で武士大将は顔まで描かれているが、農民から急擲兵隊にされた雑兵たちは『へ』の字でしか示されていないことに疑問を持った柳田が、この『へ』の字こそ歴史の本流があるのだと考えた。目に一丁字なき人々こそ歴史をつくりだしてきたのだ、と柳田はくり返し強調した。」⁴⁾と述べている。

柳田の教育論では常民の教育（前代の教育法）に価値を見出し、近代の文字中心の教育よりも言葉中心の教育（前代）に見るべきものが多いことを強調している。この点は日本民俗学を常民の学であると主張していた柳田においてはうなずけることである。

(1) 常民の教育

彼は文字の文化以前の日本文化の原型を伝えるものとして、はじめ山人に関心を抱きその証明を考えていたが、『山の人生』（大正15年出版）をまとめた頃から山人の問題はとりあげなくなって、常民をとりあげ日本文化の伝承者としたのである。柳田が山人より常民へと変った契機としては、1921（大正10）年～1923（大正12）年の間、国際連盟常設委任統治委員として仕事をしてきた時代に、遊牧民など移住民についてくわしく知ることができ、自分が描いていた山人などは幻想的に過ぎないことを思い知らされたことが一つの原因であった。

さて、常民であるが「ごく普通の百姓で…略…住民の大部分を占めている。」⁵⁾と昭和10年出版の『郷土生活の研究法』で述べている。貴族や上級武士に対する階層を示すために柳田が考え出した新造語で、昭和10年頃の社会情勢では人民・大衆は政治的階級的過ぎるために苦心の結果によるものと思われる。

明治の学制以後の学校教育が、前代の常民の生活を忘れ画一的で何に役立つか知れぬ教育を押しつけ、日本の社会に連綿として続いてきた常民の教育（前代の教育）を無価値としていることへの強い抵抗であった。

「学校は炉のほり緑樹の陰、又は青空の下であり、教員は目に一丁字無きちよん鬢の故老であり、教科書は胸に描く印象と記憶とではあったけれども、其頃の青年はほぼ一人残らず、覚ゆべきことは覚え学ぶべきことは学んだのみならず、年を取るにつれて更に自分が又教師となって、教材に若干の補充改訂を加へつつ、次に生まれて来た者を教えて居たのである。如何に道理のわからぬ人たちだとしても、是をしてなほ国民の教育で無かったと思ったのは、よっぽどどうかして居る。」⁶⁾柳田の描いた前代の教育のイメージがよく示されている文章であるが、昭和8年に発表したものである。

(2) 十人並の教育

昭和22年12月『教育復興』に発表した教育論で戦後の新教育について述べたものである。『昔は知能水準は、なるほど今より低かったにちがいないけれども、教育の結果として層は少なかったようである。現在は6年なら6年の義務教育で押さえていても、学校をはなれてからは予期したとおりにはない。教科書そのものにしても欠点があり、これは皆が一様に使えるようにつくるべきである。教育は優秀なる者だけのためにあるのではない。おまえは層だからと突っぱなすのでは困る。優秀な者をいくぶん犠牲にしても、より低い大多数の者を教育することこそ真の教育の任務である。昔は十人並の人間をつくれれば教育効果はあがったと考えられたのである。』⁷⁾

明治5（1872）年の「学事奨励に関する被仰出書」には、学問は身を立てるの財本と規定し

て日本の教育は開始されたのであるが、柳田は自分の受けた教育を批判し、常民のための、十人並の教育を意図していたのである。しかし、ここで注意すべきはエリート教育をすべて否定したのではなく、十人並教育とエリート教育の両立を考えていたのである。

(3) 平凡と非凡

柳田のいう平凡な教育は、文字を介さない前代の教育であり、非凡な教育は、読み書きを主とする新しい教育のことである。平凡な教育について「少なくとも斯うして社会の表面だけは、一方の新しい教育によって蔽はれてしまふ様になったのである。しかし、この表面の現象即ち読書教育の普及によって直に旧式教育法の没落を推断するのは誤りである。今でもこの二つのものは厳乎として対立している。」⁸⁾と述べている。

以上、柳田の教育論の特徴と考えられる点を見たのであるが、「常民の教育」・「十人並の教育」・「平凡な教育」に共通するものがある。それは明治5（1872）年から始まり現在までの公教育（近代の教育）に対し、それ以前の前代の教育への注目である。前代の自然の教育のよい面が教育を制度化する公教育によって消されていることに対するの怒りを示していることで、彼は前代教育のよい面をひき継ぐべきことを願っていたのである。

いまひとつ柳田は教育を制度史的にみないで、人間の精神史的な側面でみていることである。この点が教育学者の教育論と噛みあわないところで彼の弱点ともいえるのではないかと考えられる。更に平凡人の教育であるが、十人並の考え方と同様で、島国における共同生活の論理から、俗にいうはみだしをつくるまいという生活からの所産といえる。だからこの平凡人教育を徹底すれば逆に悪しき平等主義に至ることもあり得るので彼の教育論の盲点といえるのである。

2. 社会科論

戦後柳田が社会科教育に積極的に取り組んだ理由として次の二つの意見が見られる。宮本由輝は「柳田が第二次世界大戦後民意を正しく反映する選挙のための啓蒙活動に乗り出し、国語教育をその手段として位置づけ、それら教科書の編纂にきわめて積極的にかかわるようになるのは、みずからがかつて推進した普選の現実が理想とあまりにもかけ離れてしまったことに対する深い慙愧の念があったからとみることができよう。」⁹⁾と述べ、大正13（1924）年から昭和5（1930）年まで東京朝日新聞の論説委員として多くの社説を書いたが、そのなかでも普通選挙についての主張が多く見られた点を指摘し、社会科の最終目標として、賢くくて正しい選挙民の育成を掲げている点にもその辺の事情が推察されるとしている。

次に宮田登は「戦後の柳田は、民俗学の実学性を強調していた。たんなる昔の穿鑿から足を洗わせ、本来民俗学がもつべき、現代の疑問に答え得る姿勢を説いた。だから、昭和22年学校教育法が施行され、社会科が誕生すると、ここに民俗学の存在理由を見出し、積極的に参加することを働きかけたのである。」¹⁰⁾と、社会科に期待した柳田の姿を描いている。

両者の意見はともに妥当と考えられるが、主として後者の考え方に従いながら柳田の社会科論を見ることにする。

(1) 社会科への発言

柳田の社会科への発言を『書誌』（定本別巻5）からみると次のようである。

- | | |
|--------------------------------|-------------|
| ①昭和21年『歴史教育の使命——くにのあゆみに寄す』（口述） | 毎日新聞社10月28日 |
| ②昭和22年『社会科の新構想』（座談会） | 成城教育研究所 |
| ③昭和23年『社会科のこと』（月曜通信） | 民間伝承12-1 |

④	ク	『村のすがたと社会科教育』	朝日出版月報 4
⑤	ク	『社会科教育と民間伝承』	民間伝承12-7
⑥		昭和24年『文部省社会科関係者との座談会』（社会科の諸問題）	三省堂
⑦	ク	『社会科教育をめぐる座談会』（ク）	ク
⑧	ク	『社会科教育と民俗学についての座談会』（ク）	ク
⑨		昭和26年『序』（口述）（民俗学辞典）	東京堂
⑩		昭和28年『社会科教育法』和歌森太郎執筆	実業之日本社

以上のうち②、⑥、⑨についてとりあげることにする。

・社会科の新構想（座談会）成城教育研究所

昭和22年10月に民俗学研究所でもたれ、柳田の考え方が明白に示され教科書『日本の社会』の基礎となっている。内容の項目は次のとおりである。

- ・社会科とは……「世の中」ということと同じだ。
- ・史心……………歴史教育の根本理念は「史心の育成」で柳田社会科の基本概念となる。
- ・一年の社会科…やはり家ということから始めるとよい。

以下2～3年以上の社会科・社会科のテーマ・社会科の学習・農村の社会科・文部省案・社会科の参考書などについて柳田社会科の重要な骨格部分が語られているが、対談の最後で柳田は「どうも根から御相談相手になれなくて、はなはだ済まなかったと思いますが、私の要求が性急に聞えるのは、全く年をとっているからです。ほんとうに明るくなるまではまてないから、今のうちに確信をもってやってもらいたいということを強く言うのです。悪しからず了解して頂きたいと思います。」¹¹⁾と社会科への期待と年齢からの焦りを率直に発言している。

・文部省社会科関係者との座談会（社会科の諸問題） 三省堂

昭和24年7月11日民俗学研究所において、文部省側勝田守一、豊田武、塩田蒿。研究所側は柳田国男以下11名が参加し、柳田社会科の性格、主張点をうかがい知ることができる。

柳田は学問は疑問から始まるとくり返し説き、社会科教育も問いや疑問を大切にしそれに答えることの重要性を主張していたが、文部省側の社会科の問題と、柳田の疑問とが取り上げられた。勝田が学習指導要領は問題中心であり子供たちの持っている問題の中から意義あるものを学習に取り上げ、現実の社会的要求と関連させ進めることが社会科と説明した。はじめ柳田は自分の主張している疑問と勝田のいう問題が一致するように考えていたが、討論が進み概念の違いに気付くのである。

勝田の問題とはプロブレムの翻訳で知的なものや行動を含んでいて、社会科はその問題を通じて知識と行動が結びつくことをねらっているが、柳田の疑問は子供の疑問を集め分類することによって教科書ができると発言している。すなわち柳田はこの時点では、社会科は人間形成より知的に偏るとらえ方をしているのである。

以上の点について谷川彰英は「柳田の社会科論の限界と、柳田には教育の過程論が欠けていた。」¹²⁾と批判しているが、柳田の社会科への熱意は随所に見られるのである。

・序（口述） 民俗学辞典 昭和26年1月12日 東京堂

「社会科教育の前途を考えて行くと、人が世に生きる為に必要な知識の、現在は特に整理せられず、総合統一の甚だしく欠けていることが、先ず大きな苦勞の種である。いわゆる鑄型に

はめる教育は憎まれていたけれども、もとはともかくも或る鑄型があった。そしてまた嵌込みの技能も実は相応に進んでいたのである。しかるに一朝にしてその鑄型はこわれ、急いで代りのものの考案に着手したが、それすらもまだ一つも出来あがっていない。…略…民俗学辞典の目的は、最近この学問がどれだけ進み、又どの程度にまで世の中の利用に適するようになったかを明らかにするのもその一つであるが、我々が之を企画したもう一つの動機は、あたかも現在の社会科教育の悩み苦しむ所を、すでに少しばかり経験して来ている故に、必らず何等かの参考になるという自信に発している。」¹³⁾

民俗学辞典が社会科教育の資料としての役割を果たすとの自信の程がうかがえるが、この序の最後で国民自らが賢くなり自己改造し、よき選挙民となることを望んでいるのである。社会科イコール日本民俗学ほどの熱意を示している。

II 柳田社会科の単元と内容

1. 『社会科の新構想』以後

昭和22年の成城学園の教師と柳田との座談会が契機となり昭和24年6月16日より成城学園初等学校の社会科部員が毎週木曜日に民俗学研究所に柳田を尋ねての研究会が2年半継続され次第に単元とその内容が姿をはっきりと現わしてきたのである。当時成城学園初等学校に在職した庄司和晃によると、この研究会での柳田の役割は、各学年毎の単元設定と内容解説が中心であったといわれている。出来た試案は成城学園初等学校で実践検討が進められたのである。

2. 柳田社会科第一次単元

成城学園初等学校と民俗学研究所賛助で、昭和24年～26年度の試案が昭和26年10月『社会科単元と内容』として示された。表1である。柳田社会科第一次単元である。

庄司和晃は「柳田が、言わば命をかけたのはこの単元の決定である。彼の社会科づくりで最も心血を注いだところだ。続いては単元一つひとつについての講義である。むろんのこと、現場人の授業上の悩みや相談ごとについては存分に耳を傾けてくれたが、社会科づくりの具体面で、彼が直接関与したのは、ここまでであった。」¹⁴⁾と語っている。

(1) 単元一覧表の特徴

「柳田社会科の成立において、総仕上げの中心的リーダーであった菊池喜栄次氏は、単元の設定について『まず我々の集めたアメリカや全国の単元表から、採用できるものは何々かにつ

表1 柳田社会科第一次単元

学年 学期	1 学 年	2 学 年	3 学 年	4 学 年	5 学 年	6 学 年
1 学期	学校のまわり 道路	海 遠さ近さ 古さ新しさ	川 食物	すまい・あかり ねんりょう 着物	共同生活 日本という国 自然	報道(ニュース) 労働・工場
2 学期	水 家畜	郵便 しごと	市 貨幣 消費	本 技術技能	交通 殖産	貿易 世界の人々 人の一生
3 学期	物をつくる 遊び	火 安全	健康 年中行事	友だち 郷土	移住 時代と人	正義 平和

(「日本の社会」別冊資料解題より)

表2 社会科単元内容の分析

— 4 年 —

単元	地 理	歴 史	公 民	民 俗
す ま い	農村の家と都会の家 すまいのちがいとその理由 土地のちがい 材料のちがい	いろいろな家のかたちと 発達 室内照明の改良発達 ねんりょうのうつりかわり	すまいの改良 部屋のあかり ねんりょうの上手なとり方	民 家 間 取 り 出 居 いろり(ほぐち・うずめ火)
あ か り	明 る さ 土地とねんりょうのちがい			か ま ど ユ イ
ねんりょう				屋 根 しょうじ 松やに・油のうつりかわり ねんりょう

(文明と伝統の授業より)

いて話合った。単元一覧表でもわかるように約40の単元があるが、よその学校と共通な単元は、郵便・郷土・交通・報道・労働・工場などで7分の1にしかあたらぬという事実を見出したのである。いま世間では道德教育や公民教育のことを唱えているが、(柳田)先生は早くから、遊び・友達・共同生活・人の一生・正義・平和という単元の必要を力説されたのである。』ひとつの得がたい消息である。結局のところ柳田社会科は極めて創造的な、日本人の力量を発揮した社会科としての誕生でもあったわけだ。¹⁵⁾と庄司和晃が述べているが、民俗学の成果を社会科教育に活用することを願った単元作成であり、社会生活の現実を歴史的に理解させるための苦心がうなづける単元一覧表である。

1年単元の「遊び」、2年単元の「古さ新しさ」「火」、3年単元の「貨幣」「年中行事」4年単元の「すまい」「あかり」「ねんりょう」「着物」「郷土」、5年単元の「時代と人」6年単元の「人の一生」などは柳田らしい単元と思わせるものがある。

(2) 単元内容の分析

苦心した単元ではあったが第一次単元は内容的にあいまいで授業に使いづらいの批判があったために、内容分析が進められた。表2は4年単元の一例を示したものであるが、分析の視点に民俗学が含まれているあたりその特徴がよく発揮されている。

お わ り に

柳田社会科の成立過程をまとめると、

- ・ 出版 社会科の姿を示す 『社会科の新構想』 昭和22年10月
- ・ 模索 主張点を示す 『社会科の諸問題』 昭和24年11月
- ・ 成立 第一次単元 『社会科単元と内容』 昭和26年10月

以後柳田社会科は民俗学研究所を中心に進められ、第二次単元と内容の作成と検討・教科書『日本の社会』の完成へと発展するのであるが、それは次稿で考えることにする。

柳田は自分のたどった経歴とは逆に非凡より平凡に注目し、文献より習俗に、歴史的な大事件より日常性を重視した学風は、第一次単元に明確に示されているし、彼の思想もうかがえるのである。当然内容があいまいであるとか、内容が偏っているとか、使いづらいといった批判は出されたが、社会科に期待し熱意をこめてその完成に努力した姿には敬意を表したい。

最後に彼の教育論・社会科論の一節を示し本稿のまとめとする。

「ものには歴史がある。現在あるすべてのものに原因のないものはない。現在と過去とすっかり同じものは一つもない。昔のものは今は変わっておるが、変わるべ理由があって変ったのだ。それを子供に聴かれては答えて行く。聴かれるということはその子供だけの知識になるだけではない。一人が聴いて先生が答えると、その答は、全体の子供のためになるのですから、よい質問を出させることをやっていたらよいのじゃないかと考えるのです。」¹⁶⁾

文 献

- 1) 定本柳田国男：別巻4，炭焼日記，235，筑摩書房（1979）
（以下 定本：別4，炭焼日記，235，と略記する）
- 2) 定本：別4，炭焼日記，283
- 3) 定本：別5，年譜，651～653
- 4) 長浜功：常民教育論，15，新泉社（1982）
- 5) 柳田国男：郷土生活の研究，150，筑摩書房（1967）
- 6) 定本：24，郷土研究と郷土教育，89，
- 7) 長浜功編：柳田国男教育論集，新教育についての断想，40～42，新泉社（1983）
- 8) 定本：2，平凡と非凡，437
- 9) 宮本由輝：続柳田国男，118，柏書房（1983）
- 10) 宮田昇：新日本アルバム5，柳田国男，91，新潮社（1986）
- 11) 柳田国男：「日本の社会」別冊資料解題，41，第一書房（1985）
- 12) 谷川彰英編：文明と伝統の授業，120，明治図書（1979）
- 13) 柳田国男監修：民俗学研究所編：民俗学辞典，序（口述），東京堂（1951）
- 14) 柳田国男：「日本の社会」別冊資料解題，41，第一書房（1985）
- 15) 柳田国男：「日本の社会」別冊資料解題，42，第一書房（1985）
- 16) 定本：13，社会科のこと，344